

「軍の主兵は我にあり、騎兵、砲兵任につけ」という歌があり、軍旗も歩兵聯隊だけに授与されていた。

昆初太郎氏は幹部候補生出身の先輩で、親しくお付き合いいただき、戦後40年経ってからもお会いしたことがあった。平成6年に逝去されている。

聯隊旗手を勤めていた若造の私に歌を作って励ましてくれ、北千島の守備では同じ島にいてお互い助け合っていたものである。

昆氏からいただいた歌を紹介する。これは昭和16年、私が聯隊旗手を勤めていた時の歌である。

軍旗護持し すつくと立てる 若武者よ 心ふるひぬ われらつはもの

その頃の旭川は寒く、零下35度になることもあり、軍旗祭や陸軍記念日などの観兵式がある時は、聯隊長の傍らで軍旗を奉持し、2時間以上直立不動の姿勢を維持していた。

式典が終わって聯隊長室に軍旗を安置した時も、右腕がしびれて動かず、血液循環が回復すると今度は腕の痛みに苦しんだことであった。

ある聯隊では、山道を通行中、雪

聯隊旗手時代の思い出

伊佐 二久 陸士55

私は陸士55期の元軍人で、令和4年に100歳になるが、戦時中北海道旭川の歩兵第26聯隊の将校として勤めていた。昭和16年に少尉に任官、聯隊旗手を勤めた。

その頃、私たちは軍旗の下に命を捧げるのは誇りと思っていた。歩兵は軍の主兵と言われていた時代で、

のため転倒して保持していた軍旗が折れ、責任を感じて自決した人もいた。

昆氏が作った他の歌も紹介する。

幌筵ほろむしろの 島のすがたに ふるさと

の 国後くぬしりしのびて 上陸を待つ

春あらし 千島の果ての 雪原に

戦友とも死なしめて 吹き荒れしなり

早や瀬に櫓舟 廻せば 一瞬に

沖に流され 暗く日暮れぬ

別れしは 千島の果ての 草の丘

四十年を経て 戦友ともと相見あひまる

以下に昆氏からいただいた思い出を紹介する。

一 昆氏の生まれ故郷は国後島であるが、高島丸の甲板に立って眺めた幌筵島が、国後島そっくりの地形だったので、しげしげと眺めていたとのこと。

二 大吹雪で崖からの雪崩で幕舎が潰れ、下士官、兵5名が死亡した事故があったが、この時、海岸近くで幕営していた伊佐隊の幕舎に収容してもらい、大助かりしたとのこと。

三 右記の時、沖に流された上に、真つ暗でどこが島か海岸か分からな

かったが、伊佐隊の人たちが船の到着可能な砂浜で数個の懐中電灯を丸く振ってくれたので、これを目標にして無事海岸に到着、12名が命拾いしたとのことである。

四 昆氏の記憶では、樺理と武蔵の中間、平瀬海岸の丘の上の居住地に伊佐が立寄ったとのこと、これがお別れになったらしいが、70年以上昔のことで私にもはっきりした記憶がないことを申し上げたい。

以上、故昆初太郎氏からいただいた資料を参考に聯隊旗手時代の思い出を紹介させていただいた。